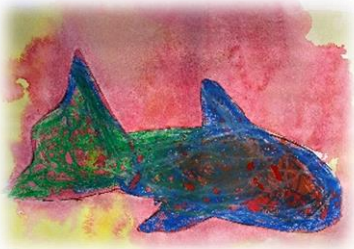

ひかりのこつうしん　No.10

2024/2/29
ひかりの子幼稚園

　教会横の畑の梅がいい香りを漂わせ、満開になりました。もうすぐそこまで春が近づいてきていることを感じる２月です。
　幼稚園各クラスでは残り少ない1日1日を、友達や担任と大切に過ごしています。
あるクラスのエピソードをご紹介いたします。

　３学期始園の日、飼っていたグッピーが水槽用ヒーターの故障で亡くなっていました。
あまりの悲惨な姿に担任は子ども達に見せずに埋葬することにしました。
朝、子どもたちが登園してきてグッピーがいないことに気付きました。
担任は子どもたちにお話ししました。
子どもたちはグッピーが居なくなったことを残念に思い、悲しんでいました。
空っぽになった水槽を見て「寂しいね」という姿もあり、
「どうしたらいいと思う？」と担任が尋ねると・・・・
子ども：「海に捕りに行く」「みんなで捕りに行こう」「グッピーは海にはおらんと思う」
　　「海にはサメとかがいるねんで」
という意見が出て、海の話しが盛り上がり、なかなかまとまりませんでした。
そこで担任が「隣のクラスから少し分けてもらうのはどう？」と提案すると・・・
子ども：「隣のクラスからもらうのはよくないと思う」
担任：「なぜそう思うの？」
子ども：「だって家族だから・・・。バラバラになるのはかわいそう」
　　と真剣な表情で思いを伝える子どもがいました。
担任　：「そっか、そう思うんだね。家族だもんね」
子ども：「そうだそうだ」「家族だ」「それはあかん」
担任：「じゃどうしよう？」「みんなおうちでも考えてきてくれるとうれしいな」
　　と宿題を出しました
翌日、子どもたちに宿題の答えを尋ねると、「グッピーを買いに行きたい」「カインズに見に行ってきた」「ムサシにも売り場があった」等々・・・、様々な提案や情報が集まり、一気に話が進みました。

話し合いの様子

しかし前述の子どもが困った顔で
子ども「飼うのもあかんねん・・・」
担任：「なぜそう思うの？」
子ども：「警察が来るねん」
　　「ちゃんとお世話しないと警察がくると思う」
よく聞いてみるとこの子の家には保護猫がいて、
迎え入れるにあたり、家族が最後まで責任をもって
飼うことを約束しているために出た言葉でした。

園長に相談しているところ

その子の家では家族みんながお世話をしていて、警察が来ていないとのこと。
担任が「じゃあ、ちゃんとお世話すれば飼うのは大丈夫なのかな？」と聞くと
「それなら大丈夫」とほっとした表情で返答してくれました。
みんな:「お世話できる！」「お当番がお世話することにするのは･･･」「それがいい」
となりました。そこから、

運転手さんにバスの相談

〇誰が買いに行くにか？
〇どうやって行くのか？
〇お金はどうするのか
　実現に向けての話し合いが続きました。そして、
●みんなで園バスに乗って、ホームセンタームサシに
　買い物に行く
●運転手さん、付き添いの先生をお願いする
●お金は園長先生に相談する
　ことにようやく決まりました。

熱帯魚に興味津々

「それはなんですか？」

　当日までにグッピーに心地よい環境を用意するために、熱帯魚に
詳しい職員や用務員さんからアドバイスをもらい、準備が進められていきました。
　当日、ムサシでは店員さんが帯同して、子どもたちに熱帯魚売り場の案内や、
「どのグッピーにするか？」みんな意見を聞いて雄雌2組を選んで下さいました。
　グッピーを持ち帰りのビニール袋に入れた後、シューっとエアーを注入する
様子を見た子どもたちが「それは何ですか？」と質問すると、
「幼稚園まで帰るまでの間、お魚が息がしやすいように空気をいれているんだよ。
大事に持って帰って、大切に育ててね。」
と教えていただき、優しい店員さんに出会えたことも感謝でした。

ようこそ！お部屋の水槽

　グッピーを買って帰ってきた子ども達の満足そうな顔は、本当に輝いて見えました。
話し合う、調べる、自分の気持ちを伝える、共感する、交渉する、保護者の協力や
寄り添ってくれる人たちに出会うといった活動を通じて、信頼感、達成感、責任感が生まれました。
グッピーをお部屋に迎えるまでに様々な体験をしました。このように行ったり来たり、試行錯誤する経験こそが、子どもの成長にとって大切なのです。いつかどこかで、それらの体験がきっと花開くのだと信じています。
　今は無事にお部屋の水槽に引っ越しでき、お当番さんが張り切って餌をあげてくれています。
子ども達の中に蒔かれたタネの成長を、これからもみんなで見守っていこうと思います。

　最後に、今回の活動のきっかけを与えてくれたグッピーの命との向き合い方について。
亡くなってしまったグッピーを子どもたちに見せずに埋葬してしまったことを内省しています。
核家族になり、死に直面する機会の少ない子ども達にとっては、「死」というものを知る機会だったかもしれません。その後幼稚園で長年飼っていた森のインコが亡くなったとき、このクラスはインコのお葬式に初めから最後まで参列しました。「きっと今頃、インコもグッピーも虹の架け橋を渡って、天国の神さまのところに行ってるね」とお話しし、穴の中に眠るインコ、土をかけるところも見て、お花を手向け、お墓に手を合わせて一緒に祈ってくれる姿がありました。
ひかりの子幼稚園で動物を育てること・命の向き合い方を更に深めてまいります。

園長　松本　直子